

童

2021年7月1日。

雑草 草 野菜 果樹等、恐ろしいと言おうかすさまじいと言おうか、いや躍動感溢れるエネルギーな成長を感じる毎日。夜に雨が降り、日中はお日様が照るといふ理想的な日々が続いています。肝心の人間達も、日中は野外で活動でき、夜は 夜遊びせず室内で過ごせるという暮らしができ、植物のように大きく成長できる毎日かもしれません。

子ども達は 給食 おにぎり給食 散歩 長距離散歩 泥遊び 農業や栽培 等をリズム良く組み合わせた毎日を安定して送っています。今年は、年間の見通しをしっかりとつけているので、リズムカルに安定して子ども達の毎日を保証することができています。

保護者の皆様には、給食当番やママ保育等をお願いしていますが、青ちゃんの回復を契機に、調子づいて怒濤のようにお願いをしたことを反省！！ 2学期は もう一度見直して、皆様が本来ゆったり子どもと接する事ができるような毎日を保証しますので、この忙しさは1学期限りですので、ご安心とご容赦願います。

室内においては、裂き折りやにじみ絵やわらべ歌をみっちり楽しみ、絵本はもとより、おはなしも、毎週行っています。きっと、子ども達は、わらべ歌をお家で楽しんでいることでしょう。ぜひ、一緒に家庭でも楽しんでください。素晴らしい親子のふれあいになります。わからなかったら、遠慮なく、スタッフにわらべ歌のことを聞いて下さい。

この梅雨が明けたら、エネルギーたっぷりの夏です。それぞれの素晴らしい夏のプランを考え始めて下さい。子ども達には、しっかりと楽しめる精神を養っておきます。

そうそう、この童 は、今年度初めてですね。初めての方にお伝えしておきます。この字数の多い文章は、青ちゃんの公私混同したエッセイです。好きなことを気分の赴くままに書き記しているのです、読もうと読まない、焚きつけにしても裏紙に使おうと、ご自由にして頂いて結構です。



【忘却の春】

4月初旬のある朝の夜明け前3時。文庫カフェそして焚き火コーナーのイメージが湧いた。(略) 4時、バックホーエンジン始動。文庫前の芝生を削り取り、整地。大型チッパーを移動してくる。この時に腰の違和感有り！！ 日だまりカフェのチップ敷き終了。(略) スロープの焚き火コーナーへバックホー移動。ここに、新たに、大きな焚き火コーナーを制作予定。今年のここでの単立ちの会が良かったので、更に来年を目指して良い物を作ろう！！ (略) 明日、コメリへ行って考えようと、その日は仕事終了。翌日 同じように3時。そうだ！！ 石を拾ってきて、石で作ろう ブロックよりも、自然であるし、費用はゼロ。腰の違和感があったので、入念にヨガをして腰の体操。4時 ガンガで長靴に履き替えた時！！ 腰に電気が走る。ぎっくり腰かなと思いながら、軽トラに乗り込む。(略) 河原の石を探索。ドロの中にめぼしい魅力的な石発見！！ (略) いつの間にか軽トラいっぱい。そして、その日は終日焚き火コーナー作りで終了。塩とお酒を奉納して、火入れまでして完成を喜んだ。 腰が痛いので、五右衛門風呂を焚いて その夜はたっぷり暖めた。翌朝、その瞬間がやってきた！！ 寝たきり開始。いつもと違う感じだったが、一週間もすれば直るだろうと、まだ悲壮感無し。出会いの会も、おちゃらけで担架で入場すればうけるかも などまだたかをくくっていたが・・・その後、皆様のご存じの通り。

3ヶ月の自然治癒を待つか、手術を早く受けて、痛みから解放されるか。この病気になった人は、一生寝たきりになり二度と歩けなくなると、一度は誰も思いどん底に落ちるらしい！！ もちろん、青ちゃんもそうでした。が、しかし、負けない やはり 自分に負けない。こうなったのも、悪いことをしたのでは無く、子ども達の幸せのために、大地の環境を更に魅力的にしようとしたための結果であり、神様は味方してくれると。文庫の児童文学を毎日毎晩、病棟のベッドの枕元に山積みにして読みまくった。ガラケーと児童文学しかない 60歳を越えた患者のベッドを見て、看護師さん達は、かなり何者かと違和感を持っていらした。更に、ほぼ夜中を通して、明かりがついていて 秘密の花園 とか小公女などを読む中年男性。一歩間違えば、整形外科の患者では無く、心療内科がふさわしい患者かも・・・： 秘密の花園でもハイジでも、自分と共通 主人公が 車椅子から立ち上がって歩けるようになるストーリー。どんなに励まされたことでしょう。児童文学の力は、恐るべしです

無事退院。と言っても、入院していても精神的に落ち込むし、費用もかかるので、家に戻り、通院した方がよほど良い。何よりも、児童文学のように、子ども達のエネルギーが生に伝わってくるほうが良い。そして、あの窓辺にベッドができたのでした。調子の良いときは、素晴らしい窓辺でした。でも、痛みが苦しいときは、なんと あの宮沢賢治の永訣の朝！！ の気分。つららの下がる冬だったら、確実に鬱になって再起できなかつたかもしれません。

病気から早く回復できるか時間がかかるかは、その人の将来願望にあるらしい。治ったら、あれをしたい、どこへ行きたい、こんなことをして見たいとひたすら願っている人は、早く治癒できる。逆に、何をしたいか分からない、退院したら、また会社や仕事が待っていると思っている人 逃避傾向のある人は治るのが遅らしい。 よって、退院して、一歩二歩歩けるようになってからは、(ここからの回復は、予想以上に遅かった)、春の窓辺を見ながら、ひたすら、やりたいことを思い続けた。そして、自分の時間を、更にどれだけ、第三者(身近な幼稚園)のために使っていくかを

窓辺と言えば、二つのそれがあつた。ベッドから見る窓辺。それは、五右衛門風呂や雪隠の建物をバックに、通園光景が見える風景。もう一つは、トイレから見える裏山(紅葉ガ丘)の風景。こちらは、季節の風景そのものだった。毎回、トイレの度に、窓を開けて顔を出して、その緑を眺め、匂いを嗅ぎ、空気を吸い込んだ。唯一の外との接点だった。最初は、取り忘れたタラの芽が、食べられるつぼみだった。それが、毎日毎日見る度に大きくなっていき、二ヶ月間毎日見続けて今は、巨大な枝になっている。

幼児は 「花びらの開く音が聞こえる」し「ありと会話ができる」と言われている。20年前位に聞いたことであるが、その感性を見事に表現している言葉である。このことは、「星の王子さま」に通じていることに、最近気づいた。

そして、トイレから見る窓辺を通じて、青ちゃんも、タラの芽の伸びる音、樹木が芽吹いていく音が聞こえ、膨らむ動きが見えるようになった。これは驚きであった。目や耳が良くなった訳でもなく、ゆっくりゆったりした毎日、どうあがいてもすぐに治癒できない現状、時が過ぎるのを待つしか無い現状を受け入れて、あたふたせずに、時の流れに身を任せて、自然の移ろいに素直に心傾けること、毎日同じ光景を眺めること、そんなリズムの繰り返し、そこから、幼児のような感性が、自分に生まれたのだろう。幼児にとって、リズムある毎日の繰り返し、自然の一員 メルヘンとファンタジーの世界 等 幼児期の特質こそが、花びらの開く音が聞こえる という素晴らしい感性を育てる土台となるのだろう。

銀の匙 を国語の教科書として使用した灘高校の伝説の教師橋本武の授業。銀の匙は、優しい心と繊細な目線がある主人公。一生忘れてはいけない物の見方や感受性を 銀の匙から学んだらしい。そこからのセンス。気づくセンスこそが国語力。何歳になっても、受け取る感性があれば、人生は 楽しい。 星の王子さま 銀の匙 は深い！！